

ドウグバコ [Do-gu-bako]

Vol.52
2025 January-June
Takenaka Carpentry Tools
Museum News Letter



庭に込められているもの

開館40周年を迎え、

当館ゆかりの方々と河崎敦子館長が語り合う連続企画。

今回のゲストは京都を拠点に国内外で活躍されている庭師・^{いのなかずほ}猪鼻一帆さんです。



—竹中大工道具館との出会い

^{いのな}河崎 | 猪鼻さんには、竹中大工道具館（以下大工道具館）にとって大切な宝物である庭を四季折々にメンテナンスしていただいています。いつもありがとうございます。そもそもご縁の始まりは休憩室前の庭づくりからでしょうか。

^{いのな}猪鼻 | もともと2016年初めに館の光庭、敷瓦のところ、職人仲間の3人がインсталレーション^{*1}をした時に私もお手伝いさせていただいて。一緒にワイワイとつくった時に、

^{*}1 2016.1.30-3.13「日本の面影—エバレット・ブラウン湿板写真展—」の関連イベント

庭師の仲間が素材の苔が残ったのを捨てるのももったいないから再利用できないかと思いつきました。その当時、大工道具館の茶庭の苔がボロボロだったんで、それやったらこの苔を移しましょうか、と。みんながボランティアでもうちょっと苔が生きやすいように、庭の中に陽が入るようハサミを入れたのが庭を触らせてもらった最初です。

その1年後ぐらいに「ベテランも君たち若い職人たちも、みんなが来てものをつくっていくのが大工道具館だから」と当時の赤尾館長に言っていただいて、休憩室の計画に庭師仲間とふたりで造園計画に関わってからのご縁です。

^{いのな}河崎 | 残った苔からのご縁だったのですね(笑)。お客様をご案内すると「休憩室からガラス越しに見るお庭がとって

も素敵、どちらの造園家さんですか?」とよく聞かれます。穴場的な不思議な奥へたどり着いたら、誰かがデザインした好い庭があることに皆さんとても驚かれます。

^{いのな}猪鼻 | ありがとうございます。すごく嬉しいです。

^{いのな}河崎 | 何もない場所だったのですよね。

^{いのな}猪鼻 | そうです。砂利が引いてあるだけの更地でした。土の下にむかし防空壕だったものがあるので、地面は掘らずに上に土を足して背の高い桜を植えました。桜だけでは休憩室の建物とのバランスがちょっと自然すぎる。そこに竹でつくった桜の飾り棚を加えて直線を出しているんですね、庭に。直線が出た時に、冬場って桜は全部葉っぱが落ちますので、モダンに見えると言いましょか。昔から庭

ではよく使われていることですけども。

^{いのな}河崎 | 造形的な桜がずっと立って、足元をどうしましょう。

^{いのな}猪鼻 | ああいう長方形の庭を考えた時にあそこは真横から見ると庭なので、右と左に島を分ける、あの庭の基本的な石組みもそうですが、大きいものがあれば小さいものを添えてやる、というのが庭の考え方なんです。島をふたつに分けた時に背の高い桜のある島と、こっちはもみじのふわっとした島があって、それをつなぐために、世界を分けすぎないために、長細い石で世界観をつないでいるというのが、あの庭の特徴です。

石は岐阜の恵那石です。山に行って切り出してもらった元々2トン半ぐらいの長細い石を、現地まで入れるのに、



あの島と島の間はやっぱりしらかわずな白河砂の砂紋を絵描きたかった。ならばあそこから水が落ちているイメージで砂紋を描きたいというのがあったんです。大工道具館には一滴庵いってきあんという名のお茶室があるわけで。(猪鼻)



「建築はつくった時から緩やかに放物線を描いて沈んでいく、古くなっていく。

庭はできてからゆっくり上がっていくもの。

成長する植物と建築、ふたつが合わさったところでどれだけ長く

美しい交わりを続けられるかが君たちの仕事だろう」と言われて

私たち若い職人みんながすごく腑に落ちたんです。(猪鼻)

うちの材料置き場でまず1トン半ぐらいまで削り落として、みんなで手運びで運んで据え付けて石樋いしどいにしてという…。

河崎 | 大変でしたね(笑)。石樋のアイデアは最初からですか。

猪鼻 | そうですね。あの島と島の間はやっぱりしらかわずな白河砂の砂紋を絵描きたかった。ならばあそこから水が落ちているイメージで砂紋を描きたいというのがあったんです。大工道具館には一滴庵いってきあんという名のお茶室があるわけで。

河崎 | あ、そうか! つながっているんですね。

猪鼻 | 石樋にこう全部が集まるようになっていて。その石樋に溜まった水がもみじを映したり、桜を映したり、ちょっとした水鏡になっていたり。水が浅いですから、あそこはよくメジロが来るんですね、水浴びをしに。そういう小鳥とか、花が咲いたとか、休憩室で誰かとお話ししている時に外部のものが入って会話が生まれていくというのが、庭の世界観に引き込まれるポイントです。なにかこう周りのものに動きがあって、外からの、雨であつたらポタポタ雨の波紋が出たり、とかって動きをつけるためにああいうのを置いてあります。

—庭師という仕事

河崎 | 何か迷われたことはありませんか?

猪鼻 | 茶室側のはんちく檼の生垣です。実は版築※2の土壁を考えていたのですが、当時の西村副館長から「向こうに茶室ありきのこの場所だからバランスを踏まえた庭を考えてくれ」と。別の方から「建築はつくった時から緩やかに放物線を描いて沈んでいく、古くなっていく。庭はできてからゆっくり上がっていくもの。成長する植物と建築、ふたつが合わさったところでどれだけ長く、美しい交わりを続けられるかが君たちの仕事だろう」と言われて、私たち若い職人みんながすごく腑に落ちたんです。ならばわざわざ土壁で世界を分けずに、檼の木でいいんじゃないかと。

河崎 | いいところに着地したんですね。つくづく仕事を頼む側の見識も大切だと思います。

猪鼻 | 私たちは場所を与えてもらって、自分たちの頭にある美しいものを表現できて、皆さんから褒められて、お金

※2 版築：土を突き固めて堅固な土壁や建築の基礎部分を徐々に構築する工法。土壁を鏝で削り出した大工道具館地下の大壁のデザインモチーフでもある。

までもらえるんですから。こんないい仕事はない。庭は不安定なもので、美しさって主観ですから、好みや考えを示されるのはすごく勉強になります。

河崎 | 美しく保つためには大変な手数がかかりますよね。例えば館の門からのアプローチなどとても素晴らしくて、展示を見て外に出るとまた別の奥行きのある世界が現れる。手入れされるうえで、大事にされていることはありますか。

猪鼻 | 低い目線のところにもみじが多い庭になっているので、ハサミもちろん使うんですけど、なるべくちょっとの風でも枝が揺れるように手で剪定するんですよ。ハサミを使うとどうしても硬い枝になるんです。途中でバツンと止めちゃう。もみじの枝先が自然に伸びてふわふわして、透けて向こうの景色が見えるぐらいまで薄く剪定するんですね。それによって涼しげに見えたり、奥行きが広がって見えたりするよう心がけています。

河崎 | 手で透かしているんですね。

猪鼻 | 手をよく使いますね、私たちは。編んだりもします。庭師は手で木に触ったり、石に触ったり、土に触ったりです。

河崎 | いつも何を庭づくりは糸口にされるのでしょうか。

猪鼻 | まず考えるのが人の動線です。例えば茶室であれば入り口があって待合があって、出口があって。そこをつなぐ時にどういう道を通らせるかによって形が変わってくるんです。まず決めるのは誰がどこから見るのかということと、どの入り口とどの出口をつなぐか。本当にもう理詰めから始まります。デザインというのは一番最後の話です。

入り口があって出口があった時にそのまま直線で結んでしまってもったいない、その間に家があるならば、家から見られる景色があるわけです。そうすると、家の景色の前に山を持ってきて道をこう迂回させて出口まで持っていく。そうやって庭は立体的になっていく。

あと大切なのは怖くないこと。庭が奥まで見通せたら人は怖くないですよ。木がいっぱいモサモサあって奥が見えないとか、もしかしたら何か隠れているんじゃないかって人を不安にさせるようなことは、庭では基本的にしない。まわりを見渡せる小高い山があったり、自分が身を隠せるような石があったり、手水鉢に生命に直結する水があったり。人の根源に直結するアイテムが揃っていると安心するんですよ。これって全て庭で表せているんですね。

庭って基本的に女性の方が歩いてきた時の目線で、男性目線ではないんですね。歩く幅、茶室の飛び石の幅も、全て女性の方が着物を着たうえでの歩幅と目線の高さをもとに庭が構成されています。(猪鼻)

河崎 | 中に入って行けて安心して過ごせる場所。骨格は見えてきました、では次は。

猪鼻 | 庭の場所の方角にもよりますし、落葉樹が適しているのかとか常緑樹の方がいいのかとか、日陰だったら花物は使えないとか、まあその選択肢がどんどん広がっていく。そうですね、お客様のお子さんがいらっしゃれば、お子さんが遊べるようなところをというのもあるし、茶庭ならなるべく景色の変わらない木斛もっこくなど一年中景色の変わらない植物を多用したり、横から見る庭ならば、横の線の長いものがあつた方がすごいシャープに見えるので、そういうものを使おうであるとか。私はそういうことを考えてつくります。河崎 | 生き物はお構いなしにどんどん茂る。どこまで手を入れてどこで留めるのが肝心なところのようにみえますが、庭師さんそれぞれにお考えがあるものですか。

猪鼻 | もちろん好みもあると思うんですが、私はやっぱりベースが京都の庭で、京都は暑苦しくて寒いところで、見た目に涼しく見るとか暖かく見るとかがすごく大事なこと。またバランスこそが一番ですが、庭って基本的に女性の方が歩いてきた時の目線で、男性目線ではないんですね。歩く幅、茶室の飛び石の幅も、全て女性の方が着物を着たうえでの歩幅と目線の高さをもとに庭が構成されています。私よりもちょっとこう屈んで見た時にどうやって見えるかというのが基準になっています。





河崎 | 手を入れ始めたらちょっとした加減が変わってきますでしょ。本当にすごく楽しさも自由度も高いけど、せめぎ合いながらやられているのかなと。

猪鼻 | 失敗することもあるんですけど、庭の場合は、切りすぎた、でも来年芽が出てくれる。やり直しが効くという言い方は変ですけども、その辺に幅があるので、庭と植物と会話しながらキャッチボールができる、ありがたい仕事だなと思います。

—大切にしていること

猪鼻 | 大工道具館はいろんなことをさせていただいている現場です。例えば先日つくった松明垣たいまつがき。今どき造園でつくことは本当に少ないんです。材料を全国探して、1月頃に竹藪まで私たちが切りに行って。それをシートに包んで葉っぱを腐らせて1ヶ月後にその葉っぱを糞むしったものを1本1本切って編んでできていくんです。ちょっと目隠しに使うものに2~3ヶ月かかります。時間を費やせるってやっぱりなかなか難しいですよ、いま現代では。竹を買って手に入れる方が値段は安いし。でも、うちの職人たちは葉がついてたら腐らせてから切った竹を編み込んでないとかいうのができない、自然とどう向き合うか経験する。すごい面白いことなのに、技術としてはどんどん腐れていって、伝わっていかないのは残念だなと思います。

河崎 | そこに先人たちの知恵がありますが、昔ながらの手間のかかる仕事ができることが特別なこと、贅沢なことになっているのですね。

猪鼻 | 竹をどう編んだらいいかわからないままデザインしたら、変なものができるんですよ。私たちには木七竹八堀十

郎っていう言葉があります。木は7月、竹は8月、堀は10月に塗れという。旧暦なので2ヶ月プラスぐらいだから、竹は10月ぐらいから切り始めると一番虫も入らずいい竹が取れる。言葉だけは知っていても実際やってみないと本当かどうかわからない。ちょっとずつでも職人たちが自分で試して、面白がって仕事ができる世界になればと思うんです。

河崎 | そういう場が整えられて、技術が引き継がれていくことが理想ですね。

猪鼻 | いま海外では日本庭園がブームという大変ですけども、日本でできないことを海外でできる機会が結構多いです。例えば巨石の石組みとか、ものすごい大きな池とか、国内ではなかなか機会がないです。去年モンゴルの日本大使館で庭づくりさせていただいたんです。マイナス42度の中で石庭をつくるのはとても大変でした。多分もう一生経験せえへんやろなと思いつつながら。楽しかった!楽しかったです、本当に(笑)。

河崎 | 伝統建築も同じで、古いものの修復や今あるものの手入れを通じて学ぶ場の方が多いと思いますが、新たなフィールドで腕を振るう機会と両方ほしいですよ。

猪鼻 | ベトナムで庭づくりした時、花をたくさん植えてくれと言われました。四季がないベトナムの方にとっての日本庭園は、木々が紅葉してカラーチェンジしている色鮮やかな景色と捉えられていることに気づきました。

河崎 | 花や紅葉などはどちらかという、ポイントとかひねりかなと思います。

猪鼻 | そうですね。やっぱり動きという意味での色の変化ですね。庭師って基本的にそのままとどまらせない、ちょっとずつでも動かしていく。光という常に降り注いでいるものが木漏れ日によって不安定に降り注いだりするのが気持ちよくなったり。飛び石もそうですね。ちょっとずつ段差が違って、体を揺らさないと歩けないところっていうのは、揺れた体を元に戻そうという力で、心が調整されていく。水のポタポタの波紋もそうですし、そういう効果で庭が心地よく見えるものになるだろうなど。



形だけの庭ではなく

言葉で伝わっていく庭。

庭ってすごく言葉、言語に似ていて

そういうところを今ちょっとやりたいなど

思ってます。(猪鼻)

—庭は言葉に似ている

河崎 | 話は戻るんですけど、家業を継がれてこれまでいかがでしたか。

猪鼻 | 実は継ぐことだけはしまいと思ってました、若い頃は(笑)。庭は完成がないんですよ。予算は決まってるのに、これ以上やったら良くなるとわかったらやってしまうんで、この仕事どうやらな?と思ってました。でも高校を出た時に父から「どんな仕事に就こうが構わないんだけど、この家に生まれたからには修行には行ってもらおう」と言われて、熊本に3年間修行に行きました。帰ってきた時には、これはひょっとしたらすごく面白い仕事なんじゃないかなと。

河崎 | 筋金入りじゃないですか。

猪鼻 | 一筋なんです、これ一筋(笑)。

河崎 | 約30年ほど庭師をされてきて、庭づくりに対する考えに変化はありますか?

猪鼻 | まだまだこれからですが、1年1年新しい扉を開いていけるなと思ってます。ちょっとずつでも進みながら30年近くさせてもらえて、すごい幸せなことだと思います。

河崎 | 海外のお話もありましたけど、いま何か興味を持たれていることはありますか?

猪鼻 | 庭には物語がいっぱいあるんですよ。もみじにしろ、植物にしろ花にしろ。百人一首で読まれているものもいっぱいあります。そういう物語が後ろにあるものがひとつの空間に寄り添っている。例えば、こちらの庭にもある山吹色の山吹を歌った太田道灌の「七重八重 花は咲けども 山吹の 実のひとつだに なきぞ悲しき」。鷹狩りに行って雨が降ってきたから傘を借りようと近所の農家に行ったら、その家の人が山吹の花を一輪出すんです。山吹って花は咲くんですけど実がつかないんです。自分は貧乏だから糞みのがないのと、山吹の実もつかないのをかけて、私は貧乏だから傘も持ってませんと歌を詠む。こんな物語とともに愛されてきた植物たちのことを知って、一段と庭を好きになってもらえたりします。

河崎 | 込められたものがあるっていうのは面白いところですね。



猪鼻 | 形だけの庭ではなく、言葉で伝わっていく庭。庭ってすごく言葉、言語に似ていて、そういうところを今ちょっとやりたいなと思ってます。

河崎 | 庭は高尚で静かなものではなくて、訪れる人、庭師さんや持ち主にさまざまな何かを発しているのですね。

猪鼻 | 花が咲いたら落ちるじゃないですか。このままじゃいてくれないんだろうなっていうのが日本人は好きなんですよ。椿はつぼみの段階でこれから花が咲くんだという期待感であったりとか、咲いたらこれは散ってしまうんだろうなという物悲しさみたいなものと。なので、紅葉はこのままきれいなままずっとはいないという前提で見られている、この瞬間が良いっていう。

河崎 | 過去と未来をイメージできるから、今が新鮮にというか美しく見えるのでしょうか。

猪鼻 | そうですね、日本人は若葉が萌えはじめると大人も子どももワクワクします。どの季節も庭は人の感情をゆっくり揺らしてくれます。賑やかで、時に静かで、ハッとさせられることもあり、こんな楽しい空間は他にありません。

河崎 | 本日はありがとうございました。これからもどうぞよろしく願います。

【プロフィール】

猪鼻一帆 (いのはな・かずほ)
1980年京都生まれ。寺社仏閣に囲まれた環境で育ち、幼少期から庭で遊ぶ。建築とは異なり、自由な線と生きもので構成される庭という空間に魅了され、18歳で庭の世界へ。熊本で修行を積み、造園と自然に関する造詣を深める。帰京後、父であり師である猪鼻昌司の下で庭づくりを開始し、後年にいのはな夢創園を継承。竹中大工道具館の作庭に関わるほか、代表作に「東京 kudan house」「某国日本大使館」など。



Interview

ほどこいて、くむ

2020年、ユネスコ世界無形文化遺産に「伝統建築工匠の技」が登録されました。日本が誇る木造建造物を保存・継承してゆくために欠くことのできない17の選定保存技術です。来春の企画展ではこれらの選定保存技術のうち、伝統建築を守り継ぐ「建具製作」の技術を紹介します。

日常生活の中で「建具」という言葉はめったに耳にしません。朝起きて開けた窓、布団をしまった襖の戸やクローゼットの扉、家を出て鍵を閉めた玄関の扉、これらの空間を間仕切る装置を総称して「建具」といいます。毎日何度も開け閉めをして、触らない日がない、日常生活に欠かせない装置です。毎日触れ、生活に欠かせないものだからこそ、少しの隙間風や少しのガタツキ、少しの傷でもストレスを感じる。このような覚えがあるのではないでしょうか。

日常的に酷使し、時に風雨にさらされる過酷な状況に置きながら、実用に耐える気密性と駆動性、そして室内外の空間に趣を添える装飾性を求めるという、使う側の「わがまま」に応える建具製作の技術。完成した建具からは伺い知れない、見えない部分にこそ伝統の知恵と技術が込められているのです。

今回、「建具製作」唯一の選定保存技術保持者の鈴木正さんにお話を伺いました。鈴木さんは、16歳の時に京都の建具職人・鈴木茂吉氏に弟子入りし、以降一貫して、国宝や重要文化財建造物等の建具の修理・復原工事に従事してこられました。昭和27年の妙心寺小方丈の修理工事をはじめ、大報恩寺本堂（千本釈迦堂）、平等院鳳凰堂、慈照寺東求堂、東福寺三門、相国寺本堂、角屋、清水寺経堂、西本願寺御影堂など、その経歴は伝統建築の修理の歴史そのものです。

建

Tategu

具



鈴木さんがこれまでに会った最高の仕事が施された棧唐戸の原寸模型
扉左縁が吊元、右縁が手先（全国伝統建具技術保存会製作）

——まず、建具製作の技術とはどういうものなのでしょうか。

建具の中身は見せるものとちがうからね。建具の出来上がりは同じでも、見えない部分にいろいろな工夫がしてある。文化財の建具はほとんどやったけど、解体をすると、こんな仕事をしてあるのかと感心することがある。見えないところやから適当に仕事したってわからへんのに、考えて考えて、お施主さんのために思ってわざとやりにくい仕事をしてある。

——伝統的木造建築に用いられる建具には、^{いたとびら}板扉や^{さんから}棧唐戸、^と蔀戸、^{しどみど}板戸、^{こうしど}格子戸、^{まいらど}舞良戸、障子といったさまざまな種類がありますが、例えば、一口に棧唐戸と見ても、見えない部分はちがうのですか。

保存会の研修で模型を製作している棧唐戸は、今まで出会った中で最高の仕事がしてあったものです。保存会の講師を頼まれたときに、これをつくらせてみた。框が定規縁を兼ねた構造で、表面と裏面の扉の幅は同じになっている。解体してみると、横棧は、手先側は2枚ほぞ、吊元側は1枚ほぞ。手先側の框は、表側と裏側ではほぞ穴の掘り始めの高さが異なっています。軸と框は契りですつないでいるが、こんな仕口ではどうやって入れるのかという構造になっ

ている。それだけ抜けないということです。洗濯板は、表面と裏面で波の高低がずらしてあるから、時間がたって板が痩せてきたときにも透けてこない。建具の形が出来たら完成とするのではなくて、こんなんでっしゅとお施主さんに提案をして、何十年、何百年先まで持たせようという思いで、見えないところに仕掛けをしておく。これが建具の最高の仕事です。

——建具の修理とはどのようなことをするのでしょうか。

どこの工務店に見積もりをとっても修理は無理と断られた建具があった。全部そっくり作り替えた方が^{なんぼ}楽か。そやけど本物はこれだけやねん。当初の部材が^{しもざん}下棧1本でも残っていれば、そこから割付からなにかわかる。復原ができるということ。^{うちりのり}内法は建物を見たらわかるけど、ここに何枚の建具が入っていたか、どんな割付がしてあったかは当初材がないとわからない。いくら図面を残したとしても、^{けびき}罫引の線1本でずれてくのが建具。本物を残していかないと意味がない。建具は毎日何遍も開け閉めするもんやから、傷む期間としたら建物の10分の1。柱が傷んできたなと思った頃にはもう建具は無いようになってるぐらい。その建具を建物と同じように残していこうと思ったら、なんとして

でも少しでも多くの当初材を残して、また使えるようにする、それが建具の修理。500年たった古材でも削りなおしたらヒノキのいい匂いがする。まだ生きるとのこと。もう作り替えるしかないといわれた建具でも、きちっと修理をすればあと100年は使える。

——あと100年も!?

古材の傷んだ部分をきちっと削って、それに合わせて新材で補足する。削った中の釘穴も全部埋めて、新材の補足は木目を合わせて一本の部材から^{ありみぞ}つくり出す。蟻溝を刻んで糊をしたら絶対にとれへん。強い。これで一本の木に戻ったちゅうことや。

——古材と新材を一本の木に戻すとは、相当な手間と技術が必要では？

古材で補足をすることもある。古材同士に仕口を刻んでつなげる。ずっと修理を一回一回追いかけるのは辛気臭いやろ。道具変えて、やりかえて。それが修理。木目ひとつひとつが文化財やから。何百年か後にまたこれを修理するとなって解体をしたときに、こんなことまでして残しとるわ、と見てもらえるように何とかして本物を残して、あと何百年持

【プロフィール】
鈴木正（すずき・ただし）
昭和11年（1936）生まれ。平成11年（1999）選定技術保持者（建具製作）に認定。平成14年（2002）まで京都府文化財保護課嘱託建具大工。現在は（一財）全国伝統建具技術保存会の講師を務め、全国の文化財建造物の建具修理の指導にあたる。





木目ひとつひとつを剥がすように損傷部分を削り取る



修理箇所^{ほこり}に古色を施す



塗りたての古色、乾くと同時に色が馴染む

たしたろうという思いで修理をする。

——修理をした建具はどこを修理をしたのか、よく目を凝らさないとわかりませんね。

古色を塗ってしまったらもうわからへん。わからへんようにするのが古色。塗りたての時は古材と同じ色に見えても、年数が経つと変わってくる。赤くなったり、黒なったり。木目や細かな傷、樹種によっても古色の染み方がちがう。下手な塗り方をしてしまうと、どんないい木を使っても悪くしてしまう。見られへん。

——古色の配合や塗り方にもかなりの経験と技術が必要なのですね。

建具の解体をしたときに出る埃^{ほこり}をとっておいて、それを炊き上げるんです。酒なんかを入れて、煮詰めて。その煮詰め具合で色を調整する。刃物なんかでちょっとついた傷も古色を塗ったらはっきり出してしまうし、古色を塗る前に新材のところを汗をかいた手で触るとすぐに指紋がつく。手の脂がついたらもう古色がつかへん。新しく建具をつくるよりも修理は慎重にならないとだめ。漆塗で仕上げるときは、海に漬けてあった木もあかん。貯木場^{ちよぼくじょう}が海水だと脂が抜けない。い

くら水分が抜けていても脂が抜けないと漆が浮いてきて見られへん。そういう材を見抜けないといけない。昔は木を漬けておく真水の沼とか池とかそういうのがあったもんやけど。

——保存会の研修ではどのようなご指導をされているのでしょうか。

堂宮の建具を触ったことのない職人にとっては、見たこともない仕事やと思います。手道具を使ったことのないような若い職人もいます。会社や保存会の中で初級、中級、上級と段階を踏みながら、ここまでしてやってきたということを繋いでいける職人が育ってほしいと思います。

来春の企画展では、鈴木正さんご指導のもとで実施した、重要文化財建造物で使用されていた棧唐戸の修理に密着します。普段目にはできないのは、修理後に古色を施して建物に納めてある棧唐戸です。鈴木さんの言葉のとおり「見せるもんちがう」とされてきた建具の中身。解体をして明らかになる建具の仕掛けや精緻な修理の技を、この機会にぜひご覧ください。

(取材：2024年6月18日～9月20日／聞き手：舟橋知生、写真：奥山晴日)

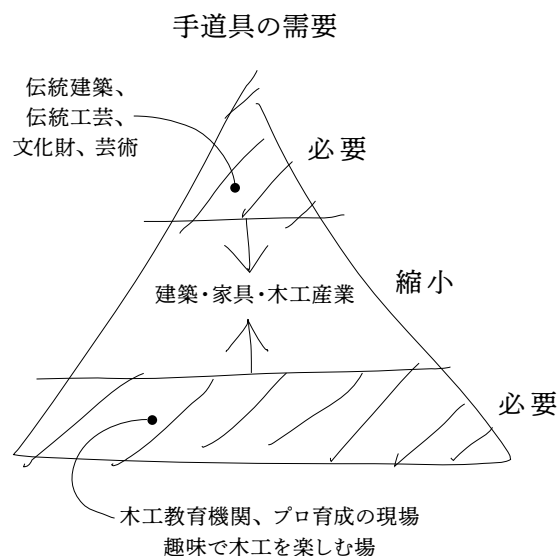
【予定】

企画展 建具解体新書 ほとく・くむ
日時：2025年3月8日[土]～5月11日[日]
会場：竹中大工道具館1Fホール



テノウチ・ワガミチ

イマノウチ



その1

手と道具の過去・現在・未来

久津輪 雅

岐阜県立森林文化アカデミー 教授 / 一般社団法人技の環 代表理事



「グリーンウッドワークで椅子を作る」
(拙著、ワン・パブリッシング刊)より。撮影：門馬央典

100年後、手道具、そして竹中大工道具館はどうなっているでしょう。ノミや鉋はもう現役ではなくなり、各地の民俗資料館に並べられている木製の脱穀機などのように、使い方の分からない古びた手道具を眺める場所になるのでしょうか。それとも木工文化は生き生きと受け継がれ、若い作り手たちが目を輝かせて道具に学び、子どもたちが木を削ることを楽しむ場所になるのでしょうか。あるいは、どんな場か？

もう既に、木工産業の現場でノミや鉋はほとんど使われなくなりました。そこではコンピューター制御されたルータービットが木を削り、サンダーが表面を仕上げ、ロボットが家具を組み立てていて、これからもこの流れは続きます。一方で、今も手道具を必要とする現場があります。彫刻や伝統建築などの文化財に携わる現場、そしてこれから木工を始めるプロを教育する現場や、木工を楽しむ人のための場所です。私は頭の中にいつもピラミッド型の図を描きます。真ん中は手道具を必要としなくなったけれど、頂点と裾野ではこれからも手道具が必要だと。

専門学校で木工を教える私は、裾野を広げる役。特に「グリーンウッドワーク」という、生の木をクサビで割

り、斧ではつり、銚せんや小刀で削って小物や家具を作る木工の普及に力を入れています。機械化が進む時代にあえて原始的な木工を広める理由は、そこにたくさんの学びの種が含まれているから。たとえば私は毎月、学生たちと様々な小径木からスプーンを作る授業をします。幹を割ると、ある樹種はパカッと気持ちよく割れ、ある樹種は粘ってなかなか割れません。割れた面にはしばしば中心から伸びる細い枝が顔を出します。その都度、木にはそれぞれ個性があり昔からそれに適した生活道具を作ってきたことや、木を板にしたときに現れる節がこの枝であり、枝を避けるように繊維が育つから節の回りでは逆目になることなどを話します。機械で製材・加工してしまうと、この学びはないのです。

木を削ることを楽しんでもらえるように、道具の開発もしてきました。兵庫や新潟や高知などの鍛冶屋さんさんにお願いして、斧や銚などのグリーンウッドワーク用の刃物を作ってもらっています。ピラミッドの真ん中が狭くなり、伝統的な道具の需要は減りました。だから時代に合わせて裾野を広げ、少しでも道具の新しい需要を生み出したいのです。それに良い刃物を綺麗に研いで上手に使うと、美しい木肌が得られますね。あまりの美しさに、時

折学生や講座の参加者から歓声上がるほどです。これもどんな機械加工でも得られません。日本の鍛冶屋さんたちが技術を高め、優れた手道具を作ってくれるからこそ、初めて出会える木の美しさがあることを多くの人に伝えています。

私の竹中大工道具館への「通学歴」は長いです。初めて行ったのは飛騨高山で木工修業を始めた頃で、中山手の旧館でした。その後教員になってからも、新しい学びを得るため何度も通っています。学生を連れて行くこともあれば、ひとりで昼食をはさんで終日館内にいることもありますね。当初の目的はまさに日本の木工の歴史を学ぶことでしたが、数年前には木工家の森口信一さんが教える我谷盆わがたべんづくり講座のアシスタントを務めるなど、道具館で木工の楽しさを伝えるお手伝いをしたこともありました。

さて、100年後。「21世紀の道具たち」という展示コーナーに、ルータービットやサンダーが並んでいるかもしれませんね。その隣に、日本の鍛冶屋さんが作ったグリーンウッドワークの斧や銚も並んでほしいなあ。そして現役でも使われ続けてほしい。そんな夢を見えています。

ドウグバコ [Do-gu-bako]

Takenaka Carpentry Tools Museum News Letter

Vol.52

2025 January- June

表紙:

“伏見区 | FUSHIMIKU”

(竹中大工道具館展覧会図録『フィリップ・ワイズベッカーが見た日本
一大工道具、たてもの、日常品』,2021)

Philippe Weisbecker (フィリップ・ワイズベッカー)

1942年生まれ。日本では広告の仕事も多く、JAGDA、NYADC、クリ
オ賞、東京ADC、カンヌライオンズなど、国内外で受賞。2020年東
京オリンピック公式ポスターも手がけた。

編集・発行：公益財団法人 竹中大工道具館

デザイン：大溝 裕 (株式会社 Glanz)

印刷：ウニスガ印刷株式会社



【編集後記】

今号からスタートしたコラム『テノウチ・ワガミチ・イマノウチ』シリーズ。
これからいろいろな職種の方々にご登場していただく予定で、次号は
大人気彫家のあの方にご執筆いただきます。お楽しみに！

来館のご案内

開館時間 9:30~16:30 (入館は16:00まで)

休館日 月曜日(祝日の場合は翌平日)、年末年始

入館料 一般 700円(600円) 大高生・65歳以上 500円(400円)
中学生以下無料 * ()内は団体20名以上 *その他各種割引あり

《アクセス》

山陽新幹線「新神戸駅」改札口より徒歩約3分

市営地下鉄「新神戸駅」北出口2より徒歩約3分

シティループ「12新神戸駅前(1F)」下車徒歩約3分

神戸市バス2系統・18系統「熊内6丁目」下車徒歩約2分

〒651-0056 神戸市中央区熊内町7-5-1

TEL:078-242-0216 FAX:078-241-4713 <https://dougukan.jp>

TAKENAKA
CARPENTRY
TOOLS
MUSEUM
公益財団法人 竹中大工道具館

